

後志利別川流域生態系ネットワークの 将来像と取組の方向性について

令和8年7月

資料の目次

1. 後志利別川流域の概要/生態系ネットワークとは
2. 類型分析による課題の整理・取組の方向性
3. 小さな自然再生の事例紹介
4. 生態系ネットワークの進め方と全体構想の作成

1.後志利別川流域の概要/生態系ネットワークとは

後志利別川流域の概要

- 「水質が最も良好な河川」選出回数で全国最多を記録する日本一の清流であり、多様な野生生物が生息する貴重な生態系を有している。
- 流域は稲作・畑作・畜産が盛んであり、米や馬鈴薯といった産品は後志利別川の水に支えられている。
- 住民主体の「清流まつり」が盛況であるほか、流域の有志によって魚道の清掃等のボランティアや植樹活動も実施されている。これらを通じて、河川環境の保全に向けた機運が醸成され、地域づくりの課題と密着している。

流域及び氾濫域の諸元

- 流域面積(集水面積) : 720km²※1
- 幹川流路延長 : 80km※1
- 法河川延長 : 208.5km※2
- 流域内市町村 : せたな町、今金町
- 流域内市町村人口 : 約12,470人※3

※1 出典：北海道開発局「後志利別川水系河川整備計画【大臣管理区間】
平成19年6月策定、令和5年3月変更」

※2 令和8年

※3 出典：総務省統計局「令和2年国勢調査報告」

主要産業



- 水田
- 畑
- 建物用地
- 水域

流域の特徴



全国一級河川水質調査(国交省)において、「水質が最も良好な河川」に全国最多の24回選出されている。



サクラマス(上)、オジロワシ(右)など、多様な野生生物がすんでいる。



両町の主産品として米(写真上)や馬鈴薯(写真下)などある。



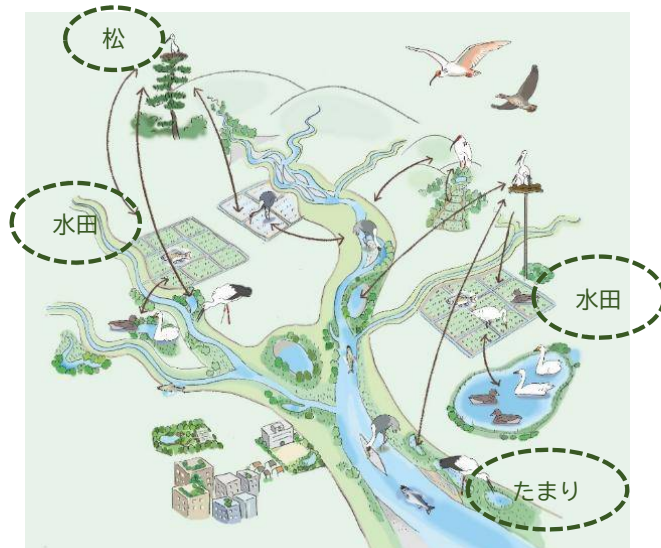
河川環境の保全活動を行う後志利別川清流保護の会の活動



「一平会」や「せたな町の豊かな海と川を取り戻す会」が魚道の清掃等のボランティアに取り組んでいる。

生態系ネットワークとは

- 左図：生態系ネットワークは、保全すべき自然環境や優れた自然条件を有する地域を核として、それらを有機的につなぐ取組である。河川は、森林や農地、都市などを連続した空間として結びつける、生態系ネットワークの重要な基軸であり、流域の中でまとまった自然環境を保持している貴重な空間となっている。
- 右図：河川管理者、自治体、農林漁業者、NPO、学校、企業などの多様な主体が連携・協働して、河川を基軸とした生態系ネットワークを形成することにより、地域の自然を豊かにするとともに、地域の経済や社会にも効果をもたらすことが期待される。



河川と流域の様々な場（湿地や樹林などのグリーンインフラ）をつなぐネットワーク

防災、産業振興、ウェルビーイングの向上
といった地域の経済・社会的な恵みにつながる



2. 類型分析による課題の整理・取組の方向性

後志利別川流域における生態系ネットワークの視点からの課題の整理

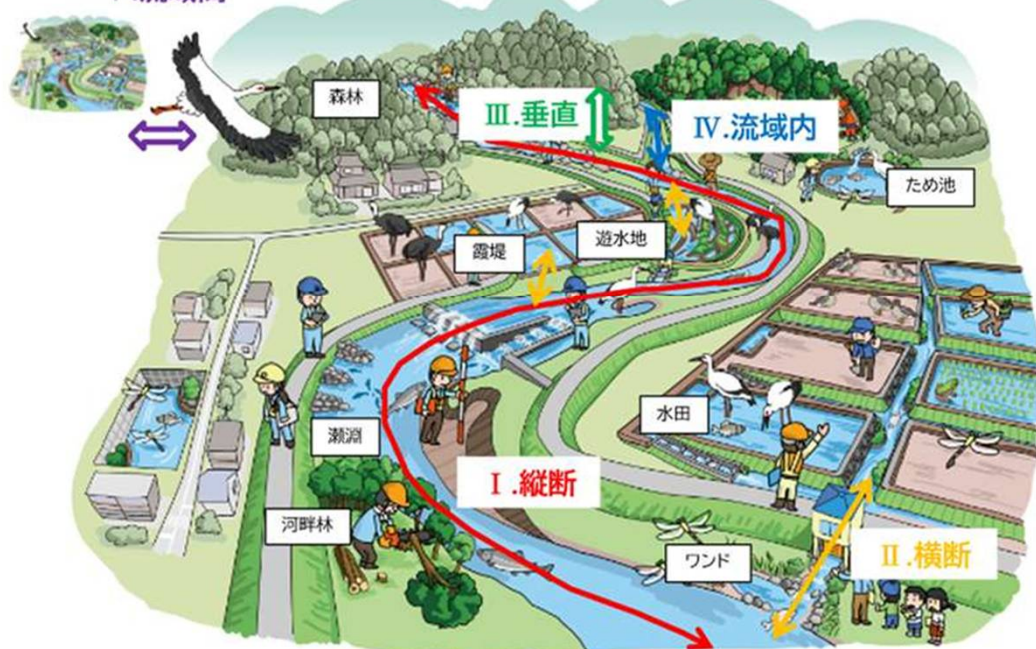
- 生物の生活史から必要とされる生息・繁殖環境に応じた縦断、横断、垂直、流域内、流域間などの生態系ネットワークの類型ごとに、現況や課題等を確認・整理することで、網羅的な類型分析が行える。

類型	ネットワークのイメージ
I. 縦断的なネットワーク	物理的な障害がなく、縦断方向（上下流）の連結性が確保されている
II. 横断的なネットワーク	物理的な障害がなく、横断方向（①河道内：水域～陸域、②河道内外：河道～水路・水田等）の連結性が確保されている
III. 垂直方向のネットワーク	地下水・伏流水と表流水のつながり（湧水環境等）が保持されている
IV. 流域内のネットワーク	流域内で生息場のネットワークが保持されている
V. 流域をまたぐネットワーク	複数流域で生息場のネットワークが保持されている
VI. 川と人々のつながり	- 流域の関係者が連携し、生息場や特定の種の保全・創出に取り組むもの - グリーンインフラを活用した地域経済の活性化やにぎわいの創出に取り組むもの

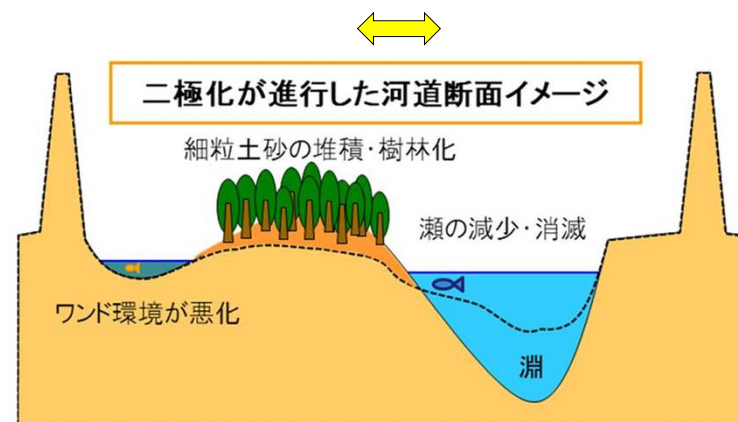
※VIのネットワークはhabitat networkではなく、グリーンインフラの多面的機能を活かすもの

生態系ネットワークの類型

V. 流域間



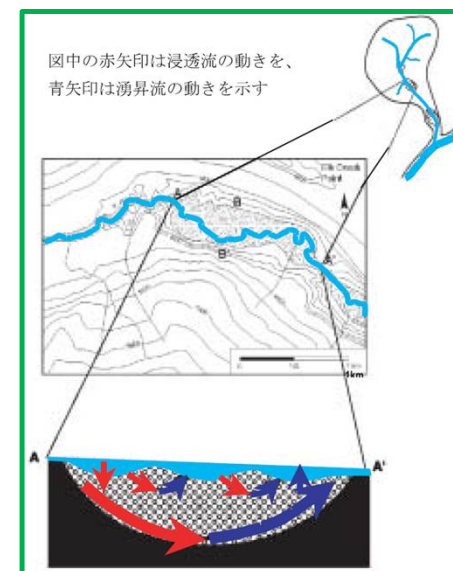
II. 横断的なネットワークに係る二極化のイメージ



二極化が進行した河道断面イメージ

[出典] 田原晃誠(2023) 木曽川の河道の二極化に関する課題と対策

III. 垂直方向のネットワークに係る湧水環境のイメージ



砂礫帯における浸透・湧昇流動態の模式図

[出典] ト部他(2004) サクラマスの産卵環境特性の評価, 北海道開発土木研究所月報 No.613号

I. 縦断的なネットワーク 現況・課題と取組の方向性（案）

- ・現状として、後志利別川本川の横断工作物には魚道が設置されており、美利河ダム上流流入支川のチュウシベツ川まで魚道が整備され、連続性が確保されている。また住吉頭首工の魚道については、より遡上しやすいものに改良が加えられている。
- ・一方、課題として、美利河ダム下流約5kmの減水区間では気候変動に伴う水温上昇による冷水性魚類への影響が懸念されている。
- ・このため取組の方向性として、**既存魚道の機能が適切に発揮されるよう維持管理**、**ダム放流の工夫により更に効果的なサクラマス等の遡上支援**および**減水区間の高水温対策の検討**を行うことが考えられる。

■現況・課題

【住吉頭首工】

- ・非取水期に魚道への通水がなくなり魚類の遡上が困難となる課題があった。このため、平成29年に関係者の協働により土砂吐きゲート部及び**魚道周辺の流路改善**を実施した。小さな自然再生による実施したものであり、今後も適切に機能が発揮されるよう継続的な維持管理が必要である。

【中里頭首工】

- ・魚道が機能しており遡上・降下が可能である。

【美利河ダム、減水区間】

- ・ダム下流の約5kmは、減水区間となっている。**気候変動の影響により水温が上昇しやすく、冷水性魚類への影響**が懸念されている。
- ・美利河ダム魚道までの減水区間における、サクラマス等の**遡河性回遊魚の遡上支援**を目的として、一定期間、放流量の増加する**弾力的管理試験**を継続して実施している。
- ・ダム下流～チュウシベツ川までの魚道（I期）が整備され機能している。



住吉頭首工流路の改善状況

住吉頭首工魚道の改善状況



■取組の方向性

短期

【既存魚道の維持管理】

- ・美利河ダムの魚道について、機能が適切に発揮されるように、適切に維持管理を行うとともに、頭首工の魚道についても、関係者が連携し、維持管理に取り組む。

【美利河ダム】

- ・弾力的管理試験を、より効果的なサクラマス等の遡上支援や、気候変動による高水温対策に資する可能性を検討し、取り組む。

- 現状として、本川、支川等の連結については、主要な河川については概ね確保されている。
- 一方で課題として、主要な河川では2河川と、小規模な河川・排水路では全体の28%に構造物を伴う落差が存在する。また、本川河道の樹林化による自然裸地が減少しており、コチドリ、カワラハココ群落などの減少に関係していることが考えられることや、樹林化に伴う河道の二極化が瀬環境に関連するアユ等の産卵環境（洪水攪乱で瀬にできる間隙が目詰まりしていない、柔らかい河床状態）に影響している可能性が考えられる。
- このため、取組の方向性として、**指標種の生息・生育・繁殖環境に寄与する支川の本川合流部の落差の解消、本川の河道掘削と連携した自然裸地と良好な瀬環境の回復・創出や、本工事まで必要に応じて「小さな自然再生」によるアユ産卵床造成を行うことが考えられる。**

■現況・課題

【支川等合流落差】（令和3年時点）

- 主要な1次支川（都道府県管理）では、17支川のうち2支川（丸山川、チブタウシナイ川）において、本川合流部に構造物による落差（50cm以上）が確認されている。
- 小規模な普通河川では、33支川のうち7支川で本川合流部に構造物を伴う落差（50cm以上）が確認され、排水路では、42水路のうち14水路で本川合流部に構造物を伴う落差が確認されている。これは**小規模な河川・排水路の28%において、構造物を伴う落差がある状況である。**



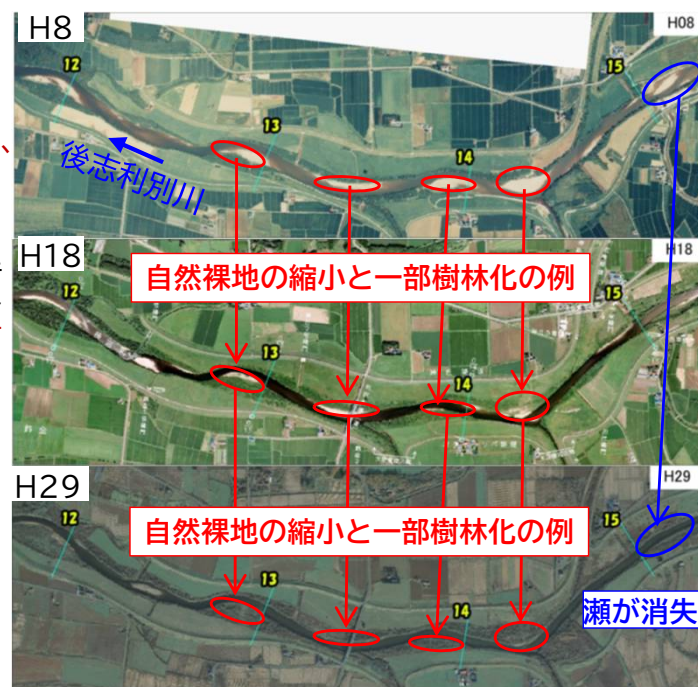
丸山川合流部の落差

チブタウシナイ川合流部の落差

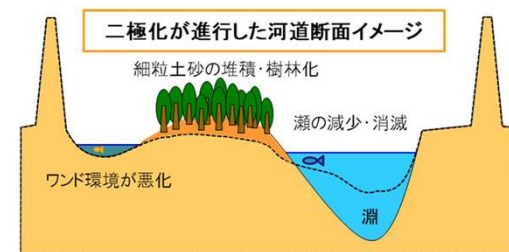
カワラヨモギ-カワラハコ群落

【河道の樹林化・二極化】

- 本川の自然裸地は樹林化に伴い、平成8～13年頃から令和4年頃にかけて、中下流（KP5～KP24）では74%減少し、中上流（KP24～KP36）では45%減少した。これに伴う河道の二極化の影響で、瀬が消失する箇所も確認され、アユ等の産卵環境に影響が生じている可能性が懸念される。
- 洪水などの攪乱により維持される「カワラヨモギ-カワラハコ群落」は、後志利別川において平成18年から平成28年の10年間で約60%減少しており、樹林化が影響していることが考えられる。
- 中・下流域の自然裸地に生息するコチドリは減少傾向となっており、主に中・上流域の砂礫地を繁殖に利用するイカルチドリは、平成7年以降の5回の調査で3回のみ確認され、直近(2018年)の調査では確認されていない。



後志利別川における自然裸地の減少、樹林化の例



二極化が進行した河道断面イメージ
[出典]「田原晃誠(2023)木曽川の河道の二極化に関する課題と対策」より引用



左がアユ産卵に適さない礫。右が適した礫（茨城県verアユの産卵場造成マニュアルより）

■取組の方向性

短期・
中長期

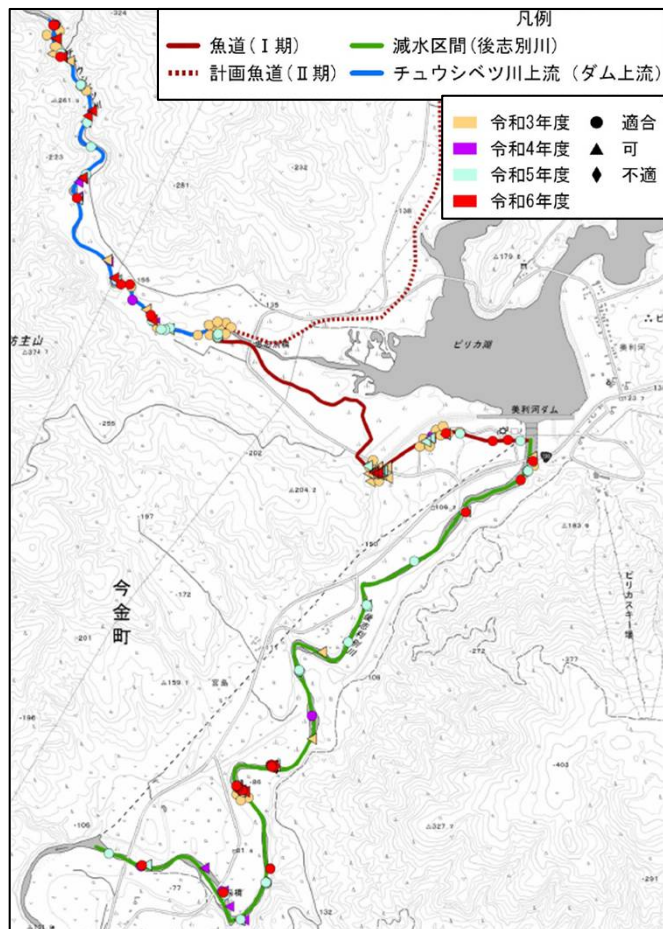
- 本川合流部の落差のうち、指標種の生息・生育・繁殖環境に重要な支川等を把握し、解消に取り組む。
- 河道掘削等と連携して、自然裸地が創出される掘削・維持管理方法を検討し、改善に取り組む。本工事までは必要に応じて「小さな自然再生」としてアユ産卵床造成なども行う。
- アユなどの産卵環境の現状把握と上記取り組みによる産卵環境への効果を検討する。

- 現状として、サクラマス産卵床の確認状況から、後志利別川における河床内の湧出・浸透環境に大きな支障は生じていないと考えられる。
- 一方で課題として、住吉頭首工下流のKP26.0～26.4付近では河床が露岩しており、河床内の浸透流が形成されないことや、水生生物が生息する基盤である砂礫床が流出した状態となっている。
- このため、取組の方向性として、河床が露岩した原因および今後の変化を踏まえ、**本川環境への影響と対策規模とのバランスを考慮した対策方法を検討し、改善することが考えられる。**

■現況・課題

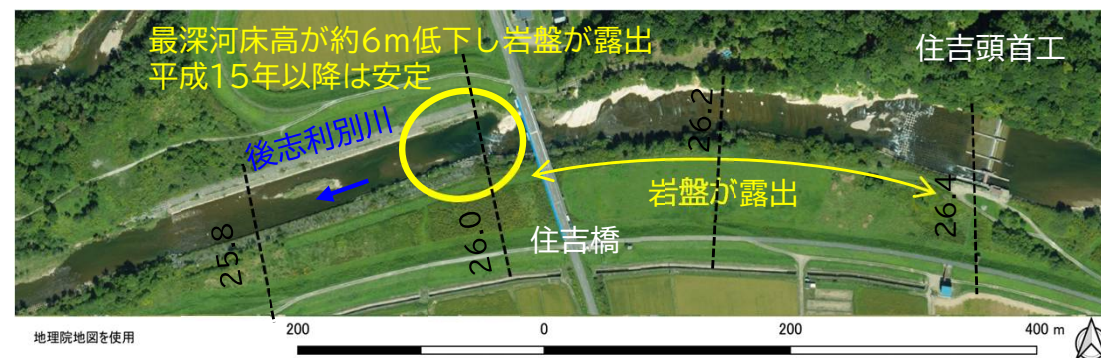
【河床内の湧出・浸透環境】

- ダム下流～魚道～ダム上流（チュウシベツ川）にサクラマスの産卵床が経年的に確認され、河床内の水の流れ（湧出・浸透等）に問題はないと考えられる。



【河床の露岩】

- 住吉頭首工下流のKP26.0付近では、昭和43年から平成15年までの約35年間に、河床の砂礫層が浸食されたことで最深河床高が約6m低下した。また、砂礫層が薄い箇所では露岩したが、約20年間は変化が少なく安定した状態にある。



- 今後の露岩河床の変化なども考慮して、その影響を把握することが重要である。

■取組の方向性

短期

- 河床が露岩した原因および今後の変化も踏まえ、本川環境への影響と対策規模とのバランスを考慮した対策方法の検討を行い、改善に取り組む。

- 現状として、既往調査より後志利別川流域の支川では河川横断工作物が設置されており、河川毎にサクラマス産卵床の確認状況が異なるが、上流部でも産卵が確認される河川もある。また、美利河ダム上流流入支川のチュウシベツ川まで魚道が整備連続性が確保されている。
- 一方で課題として、産卵床が確認されない河川もあり、落差により遡上困難な横断工作物が、遡河性回遊魚の生息・生育・繁殖域に影響している可能性がある。また、美利河ダムの魚道がチュウシベツ川から本川上流の区間で整備されていない。
- このため、取組の方向性として、**関係者と連携し、優先度を付け「小さな自然再生」の手法も活用しつつ、流域内の河川の連続性の回復を図る。**

■現況・課題

- 後志利別川流域の支川には、それぞれ役割を持った大小様々な横断工作物がある。
- 平成18年度に実施された、主要な支川のサクラマス産卵床調査より、利別目名川、メップ川、下ハカイマップ川などでは、遡上可能な構造となっている河川構造物の上流でサクラマスの産卵床が確認されている。一方で、真駒内川（上流に農業用ダム）、オチャラッペ川、パンケオイチャヌンペ川などでは、サクラマスの産卵床は確認されていない。
- 美利河ダム上流においては、ダム直下からダム流入支川のチュウシベツ川までは魚道が整備されている。一方で、チュウシベツ川から本川まで魚道（Ⅱ期）が整備されていない。



利別目名川の砂防ダム

利別目名川の横断工作物



オチャラッペ川下八束頭首工

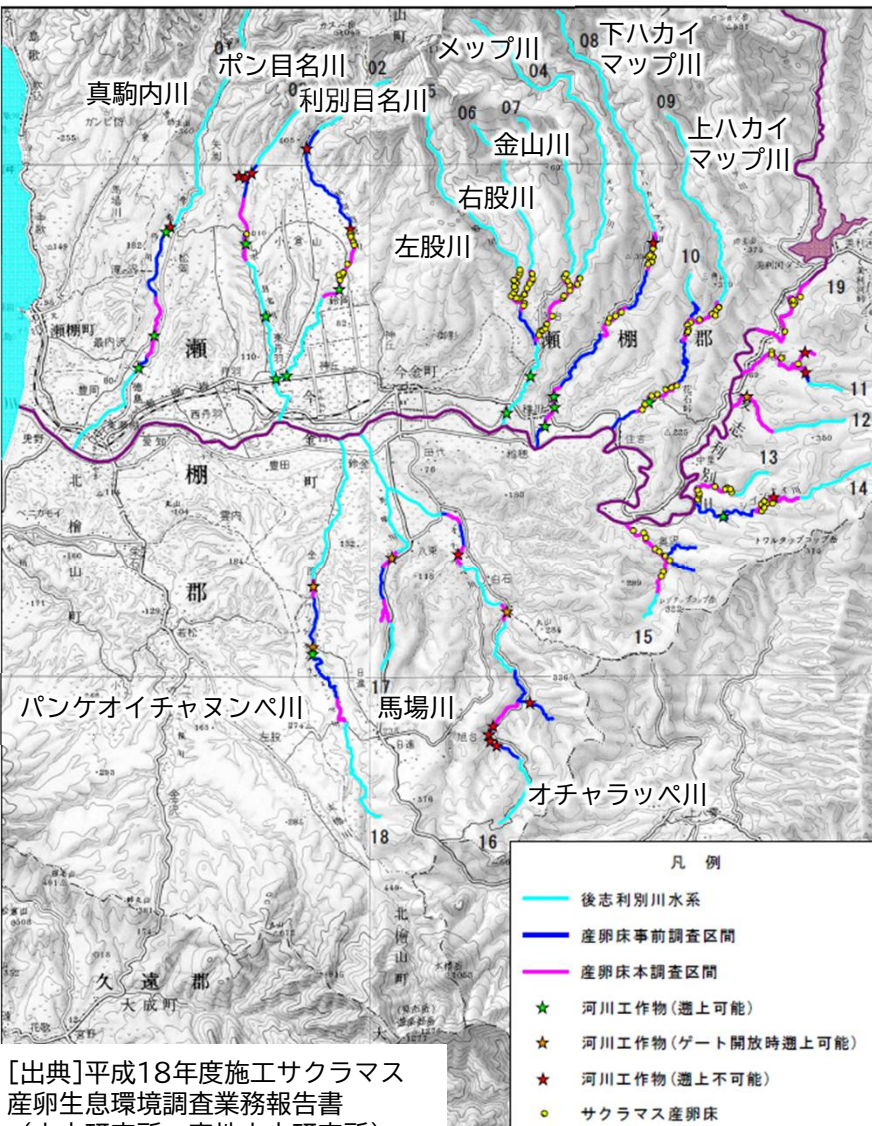
魚道の流況
(締め切り時)

注：Ⅱ期魚道の記載はイメージであり、正確なルートは定まっていない。

■取組の方向性

短期・
中長期

- 取組の効果や取組やすさなどの観点で優先度をつけながら、関係者と連携して流域内の河川の連続性回復を行う。
- 取組にあたっては、「小さな自然再生」の先行的な技法を学びながら、多様な主体が参画できる取組を検討する。



[出典]平成18年度施工サクラマス産卵生息環境調査業務報告書
(土木研究所 寒地土木研究所)

- ・ 現状として、かつて生息していたと考えられるタンチョウ、シマフクロウなど大型鳥類が現在は流域では生息していない。
- ・ 今後の流域でのタンチョウ、シマフクロウなどの飛来・生息状況等を鑑み、現状と課題の把握を行う。

■現況・課題

【広域を移動するシンボル種候補】

- ・ タンチョウは、道内で個体数回復傾向にあり、道央で継続的に繁殖が確認されるなど、近年飛来や営巣の可能性が高まっている。後志利別川流域においても、2000年代などに少なくとも複数個体のタンチョウが飛来している。
- ・ シマフクロウは、道内で個体数回復傾向にあり、環境省はこれまで生息していなかった地域での軋轢回避のための取組を開始した。後志利別川流域内の記録はこれまでにないが、近隣の長万部町、八雲町ではかつてアイヌ文化の「シマフクロウ送り（イオマンテ）」が行われていた。
- ・ 生態系ネットワークにおいては、生態系の広域的なつながりを示し、かつ多くの人に取り組みの効果を実感してもらいやすい大型の水鳥類をシンボル種に選ぶことが全国の事例に多い。北海道においては、石狩川流域で取組が行われているタンチョウや、水鳥ではないが水辺環境との関連性が高いシマフクロウなども流域をまたぐネットワークの取組のシンボル種として候補に挙げられる。



タンチョウ



シマフクロウ

（参考）過去のタンチョウ飛来状況

- ・ 2007年大陸生まれオス（識別済み）が、2008年4月、2009年4月、2010年6月から11月にかけて、2011年6月の4季にわたり、せたな町内に飛来した。
- ・ 2006年大陸生まれオス（識別済み）が、2009年4月に今金町に飛来した。
- ・ 出所不明メス（識別済み）が、2010年5月にせたな町に飛来した。
- ・ 大陸産オス（識別済み）が、2010年5月に今金町に飛来した。
- ・ 未識別の個体が2010年5月、2012年4月にせたな町で確認されている。

[出典]秋田タンチョウ友の会 タンチョウ出現情報一覧表（令和8年5月18日閲覧）
<https://www7b.biglobe.ne.jp/~akitantomo/top/page902.html>

■取組の方向性

中長期

- ・ 今後のタンチョウやシマフクロウなどの飛来・生息状況等を鑑み、流域をまたぐ生態系ネットワーク形成に向けた現状や課題を把握していく。

- ・ 現況として、NPOや地域団体が連携し、植樹や河川清掃、魚道の維持管理、「清流まつり」での体験活動などを通じて、河川環境の保全と川の魅力発信に取り組んでいる。
- ・ 一方、課題として、保全活動や親水・環境学習を充実させ、より多くの地域住民や関係者が継続的に参画できる仕組みづくりが必要である。
- ・ このため取組の方向性として、多様な主体による実践活動を継続・強化するとともに、川の魅力を活かした交流・環境教育・体験活動を拡充し、環境保全と地域振興の好循環を通じて流域全体の生態系ネットワーク形成を推進する。



■現況・課題

【後志利別川清流保護の会」「瀬棚郡内水面漁業協同組合」の活動】

- ・ 後志利別川清流保護の会では、各種イベントや植樹などを通じて、**河川環境の保全・河川愛護活動**を行っている。
- ・ 後志利別川清流まつり実行委員会（後志利別川清流保護の会、瀬棚郡内水面漁業協同組合、今金町観光協会）が主催する「後志利別川清流まつり」では、アユ釣り体験やアユの塩焼きの提供など、**アユの遊漁振興につながる体験型イベント**が実施されている。

【「一平会」「せたな町の豊かな海と川を取り戻す会」の活動】

- ・ 「一平会」は**魚道の土砂除去・清掃**などを継続し、「せたな町の豊かな海と川を取り戻す会」は**地域主体の環境保全活動**を展開している。

【地域の人々を巻き込んだ取組】

- ・ 地域団体による河川環境の保全活動が継続されている一方、その活動を**より多くの地域住民へ広げ、川とのつながりや関心を次世代へ継承**していくことが課題である。
- ・ たとえば、今金運動公園や真駒内川さけ観察広場など親水空間を活用しながら、**環境学習を通じて地域住民の参画を広げ、川への関心や愛着を育む**ことが必要である。

■取組の方向性

短期・
中長期

- ・ 多様な主体による実践活動の継続と強化
- ・ 川の魅力を活かした交流・教育の場の拡充
- ・ 環境保全の成果が地域の振興を実現する好循環の構築

後志利別川流域生態系ネットワークの「シンボル種」選定経緯

- 取組の方向性を明確にするため、シンボル種を選定した。
- 後志利別川が抱える縦断・横断・垂直方向の連続性、水系網、水系をまたぐ連続性、人とのつながりの6つの課題について、それぞれの解決にどの程度役立つかを3段階で評価した。
- その結果、川のとつながりを確保するうえで効果が高く、地域の関心も高いサクラマスとアユを、短期目標のシンボル種として選定した。

【シンボル種の検討】

後志利別川の6類型分析に即した課題について、解決に効果があると考えられるシンボル種を候補に選んだ。選定にあたっては、各課題との関わりやすさや、課題解決への適合性について、下に示す3段階で評価した。

- ◎：課題との関連性が非常に高く、シンボル種として特に有効
- ：課題との関連性があり、シンボル種として一定の有効性がある
- －：課題との関連性が低く、シンボル種としての有効性が低い

【シンボル種の選定】

- ①縦断、②横断および④水系網の課題に対しては、海から川の上流まで移動できることや、**産卵のために川底の石や砂の環境が保たれていることが必要なアユ**が、状況を考えるうえで適した種であるといえる。
- ①縦断、③垂直および④水系網の課題については、**本流や支流の最上流部にある伏流水がわき出す場所で産卵するサクラマス**が、適した種であるといえる。

- 以上のことから

当面のシンボル種としては魚類（サクラマス、アユ）を選定。

- なお、現在は生息が確認されていないタンチョウ・シマフクロウ等の大型鳥類が飛来・生息が確認された際は検討を行っていく。
- また、現在、後志利別川で生息が確認され、良好な河川の指標となりうる鳥類（カワセミ、ヤマセミ、コチドリ、イカルチドリ等）についても状況に応じてシンボル種への追加を検討していく。

シンボル種候補			①縦断	②横断	③垂直方向	④水系網	⑤水系またぎ	⑥人のつながり
鳥類	ツル目	タンチョウ	－	○	－	－	◎	◎
	チドリ目	イカルチドリ	－	◎	－	－	－	－
	タカ目	ミサゴ	－	○	－	－	－	－
		オジロワシ	－	○	－	－	－	－
	フクロウ目	シマフクロウ	○	○	－	◎	◎	－
	ブッポウソウ目	カワセミ	－	○	－	－	－	○
		ヤマセミ	－	○	－	－	－	－
魚類	スズメ目	ショウドウツバメ	－	○	－	－	－	－
	ヤツメウナギ目	キタスナヤツメ	○	○	○	－	－	－
		カワヤツメ	○	○	○	－	－	○
	コイ目	エゾウグイ	○	○	○	○	－	○
	サケ目	サケ	◎	○	○	○	－	－
		サクラマス	◎	○	◎	◎	－	◎
	キュウリウオ目	アユ	◎	◎	－	◎	－	◎
	ハゼ亜目	ジュズカケハゼ	－	○	－	－	－	－
		アジシロハゼ	－	○	－	－	－	－



サクラマス



アユ

アユの生態の特徴・生態系ネットワークとの関連性

アユ

学名 *Plecoglossus altivelis*
分類 キュウリウオ目アユ科アユ属



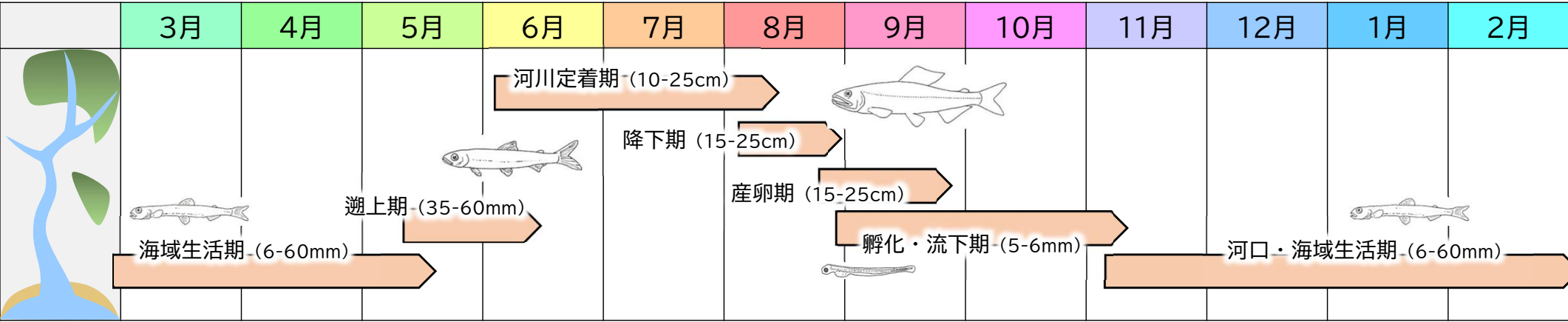
- 河川の上・中流域や清澄な湖やダム湖に生息する。
- アユの寿命は1年で、秋に生まれた仔稚魚は海まで流された後越冬し、翌春再び母川へ遡上する。これは両側回遊と呼ばれる。
- 卵は直径約1mm、卵を覆っていた付着膜が杯状に反転することで砂礫に産みつけられる。
- 仔稚魚は円錐歯を備えた動物プランクトン食性であるが、変態すると櫛状歯に変わり付着藻類食性となってなわばりを持ち始める。
- 北海道・朝鮮半島からベトナム北部まで東アジア一帯に分布し、日本がその中心。

[参考]増補改訂日本の淡水魚（2019, 山と溪谷社）

類型	アユの指標性
I. 縦断的なネットワーク	・ 仔魚は生まれて数日以内に河口・海域に流下する必要があり、下流～河口の連続性が重要。 ・ 夏季は河川全域に分散してなわばりを形成するため遡上の制約は健全に成長できる収容力を狭める。
II. 横断的なネットワーク	・ 本川中流部の河道の樹林化、二極化により早瀬など環境に影響が生じ、産卵環境に影響している可能性がある。
III. 垂直方向のネットワーク	・ アユの産卵には、浮き石環境と腐泥等が堆積しない礫間の水通しが必要なため、垂直方向のネットワークが重要な要件となる。
IV. 流域内のネットワーク	・ 夏季は河川全域に分散してなわばりを形成するため、支川の遡上の制約は健全に成長できる収容力を狭める。
V. 流域をまたぐネットワーク	
VI. 川と人々のつながり	・ 主要な食用魚の一種で、後志利別川内水面漁業協同組合にも漁業権が設定されている。

◆アユの生活史

※高橋勇夫・東健作「天然アユの本」（2016, 築地書館）を参考に、後志利別川の気候特性を踏まえて作成。イラストも上記書籍に掲載のものを使用。



サクラマスの特徴・生態系ネットワークとの関連性

サクラマス

学名 *Oncorhynchus masou*
分類 サケ目サケ科タイハイヨウサケ属



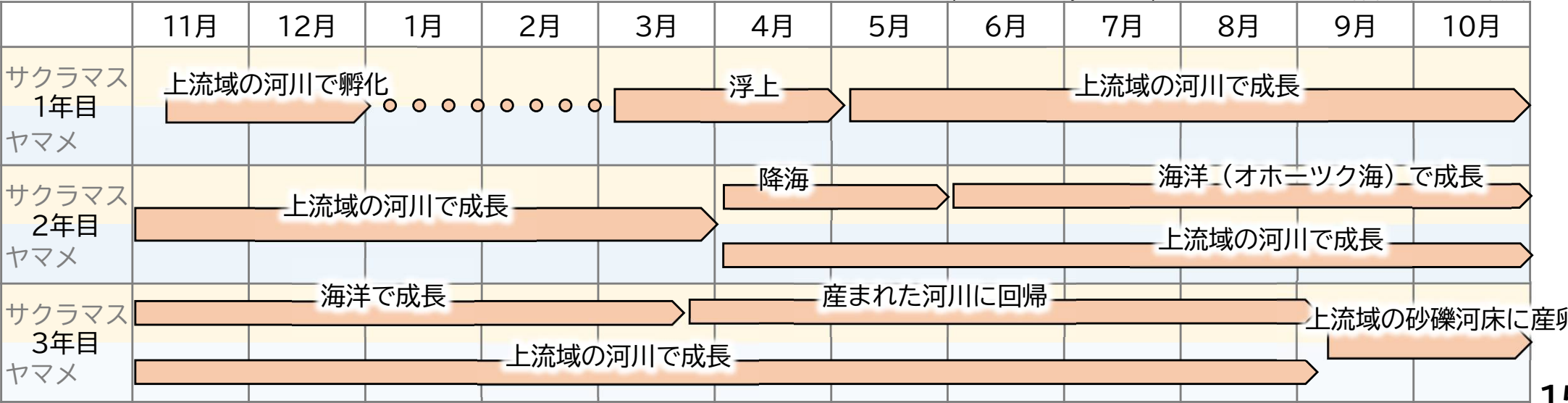
- ・ サクラマスとヤマメは同種であり、海へ下って大きく成長するものをサクラマス、一生を川で過ごすものをヤマメと呼ぶ。
- ・ サクラマスは満1年半で海へ下り、約1年後母川に帰ってくる。
- ・ 繁殖期は10月中旬から11月下旬。淵から瀬に移行する砂礫底が産卵場となる。
- ・ 河川では水生昆虫などの小動物を、海では小魚などを餌としている。
- ・ 北海道、静岡以北の太平洋側および大分県を除く九州に分布する。
- ・ 海面漁業調整規則や海区漁業調整委員会指示により、さけ・ますの増殖を行う。

[参考]増補改訂日本の淡水魚（2019、山と溪谷社）

類型	サクラマスの指標性
I. 縦断的なネットワーク	・ 生活史の中で河川上流から海域までを回遊することから、河川の上下流の連続性が重要。
II. 横断的なネットワーク	・ 河川敷のエコトーンは幼魚期の隠れ家や餌場として重要。 ・ サケ科魚類は高水温に弱く、河畔林は夏場の水温上昇を緩和する点で重要。
III. 垂直方向のネットワーク	・ 産卵適地は、流速・水深・川底の礫構成といった条件に加え、川底の礫のすき間を流れる水の量（浸透水量）によって決まる。
IV. 流域内のネットワーク	・ 生活史の中で河川上流から海域までを回遊することから、本川～支川の連続性が重要。
V. 流域をまたぐネットワーク	
VI. 川と人々のつながり	・ 主要な食用魚の一種。サクラマスを含むサケ科魚類は北海道を代表する魚として象徴性が高い。

※北海道立総合研究機構「さけますの生活史」を参考に作成。
<https://www.hro.or.jp/fisheries/research/hatch/sakema-information/td6oqn00000005yb/td6oqn000000067e.html>（令和8年5月19日閲覧）

◆サクラマス・ヤマメの生活史



3. 小さな自然再生の事例紹介

小さな自然再生の事例紹介

- ・ 釧路自然保護協会による多主体との協働を通じた「小さな自然再生」の実践例：釧路湿原に注ぐ支川において、既存施設への木組み階段式魚道の設置等を通じて、イトウやサケ・マス類の遡上・生息環境の改善が着実に図られている。

魚道整備前



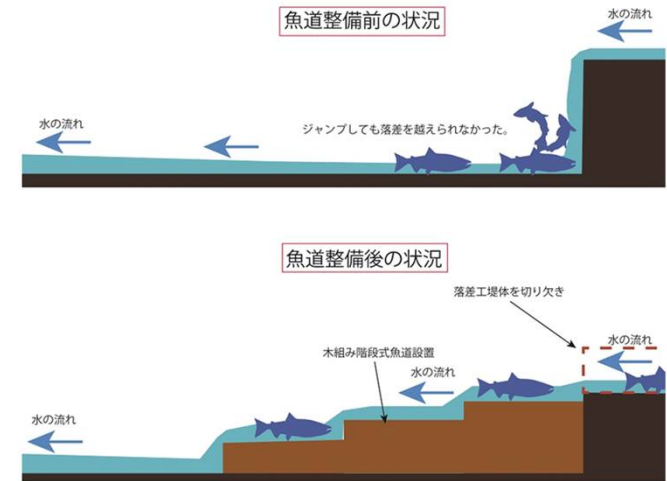
写真提供：釧路自然保護協会

魚道整備後



写真提供：釧路自然保護協会

堤体 30 cm 切り下げ、上流護床連節ブロック一部撤去、下流側木組階段式魚道設置



魚道整備による改善イメージ（縦断面イメージ図）
図提供：釧路自然保護協会



写真提供：釧路自然保護協会

2019年 流域住民、関係行政機関との協働による魚道製作
（参加者：釧路自然保護協会、道東のイトウを守る会、トラストサルン釧路、環境把握推進ネットワークPEG、当該地区自治会、関係行政機関ほか）

4. 生態系ネットワークの 進め方と全体構想の作成

生態系ネットワークの進め方（短～中長期）

◆流域スケールでの取組推進

課題分析を踏まえ、関係機関と連携し、環境整備・地域づくりの取組を推進する。

◆協議会による連携体制

多様な主体との連携・協働による取組を推進するため、学識者、自治体、関係団体、関係行政機関等が参画する協議会を設立する。また、協議会では流域の将来像を示す全体構想を作成するとともに、「サクラマス・アユ生息環境部会」および「地域づくり部会」を設置し、専門的な検討と具体的な取組を推進する。

◆できることから実践

参画する主体が、それぞれの可能な範囲（人員面、予算面等）でお互いに工夫や協力（小さな自然再生や運用上の工夫）をしながら取組の実現を目指す。



流域スケール



多様な主体との連携



お互いに協力

後志利別川流域生態系ネットワーク 検討体制（案）

- 合意形成と流域全体の取組を推進するため、推進協議会を設立し、その下に「サクラマス・アユ生息環境部会」と「地域づくり部会」の2部会を設置する。
- 協議会設立後、まず「サクラマス・アユ生息環境部会」を設置して専門的な検討を進め、その後、「地域づくり部会」を設置して地域との連携や地域資源を活かした取組を推進する。

後志利別川周辺地域生態系ネットワーク推進協議会

〔目的・役割〕 後志利別川を軸とした流域と周辺地域の生態系ネットワーク形成推進、生態系ネットワークを通じた流域及び周辺地域の地域活性化・経済振興の実現

〔検討事項（R7時点事務局想定）〕 全体構想の策定、部会の進捗管理、流域や周辺地域での合意形成など

〔構成員〕 学識者、自治体の長、団体・企業、行政機関等

〔事務局〕 北海道開発局函館開発建設部工務課、今金河川事務所

地域づくり部会

〔目的・役割〕 指標種への関心の醸成、指標種を活用した地域活性化・経済振興のための取組検討・推進

〔検討事項（R7時点事務局想定）〕 保全活動の市民参加、付加価値向上、町民等への普及啓発の各種取組を検討、実施調整

〔構成員〕 自治体の担当課、団体・企業

〔事務局〕 北海道開発局函館開発建設部工務課、今金河川事務所

サクラマス・アユ生息環境部会

〔目的・役割〕 魚類等の生息環境の保全・再生・創出のための取組検討・推進

〔検討事項（R7時点事務局想定）〕 構造物、流量、水質、産卵場、河川構造等の課題に対して改善の各種取組を検討、実施調整

〔構成員〕 学識者、団体・企業、行政機関等

〔事務局〕 北海道開発局函館開発建設部工務課、今金河川事務所

全体構想の策定について（案）

- 全体構想は、20～30年先を見据えた将来像や基本理念を示すものであり、現行の施策や取組に対して制約や変更を求めるような上位計画に位置付けられるものではない。
- 関係者が目指す方向性を共有し、それぞれが可能な範囲で継続的に取り組むための共通の指針として策定する。

◆ 全体構想策定の目的

生態系ネットワークの理念および経緯を踏まえ、後志利別川流域における生態系ネットワークの全体像と目標、今後の取組の方向性について、長期的な展望をとりまとめ、取組に参画する多様な主体と共有するため。

◆ 全体構想目次（案）

はじめに

1. 生態系ネットワークとは
2. 全体構想の位置づけ
3. 後志利別川流域の特徴や課題
4. 後志利別川流域での取組の方向性
5. 推進体制

◆ 取組の範囲



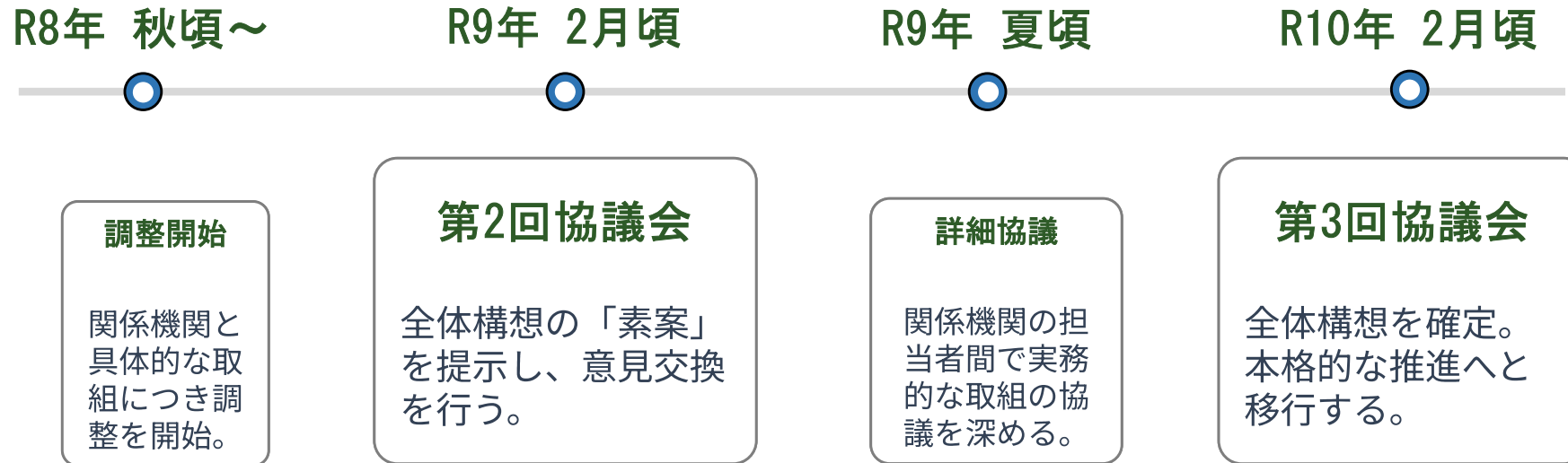
後志利別川とそれに合流する全ての支川の大市管理区間、指定区間、準用河川、普通河川とそれらの集水域を含む後志利別川流域全域

◆ 記載方針

- 関係機関や団体の意向を尊重しつつ、年次計画を含め、目標を柔軟に設定する。
- サクラマス・アユなどの自然資源を活かし、清流の保全活動が地域経済の活性化に直結するようなストーリーを検討する。
- 縦断、横断、垂直、流域内、流域間などの生態系ネットワークの類型ごとに現況や課題を整理し、それぞれの課題に対する取組の方向性を記載する。

全体構想の作成について（案）

◆ 作成のタイムスケジュール案



先行事例の紹介：石狩川流域生態系ネットワーク全体構想

- ・ 左上：「全体構想の位置づけ」と、「対象区域」のページ。
- ・ 左下：「ロードマップ」のページ。20～30年スパン（2050年まで）の時間軸が視覚化されている。
- ・ 右：関係機関の役割を大まかに定めたページ。

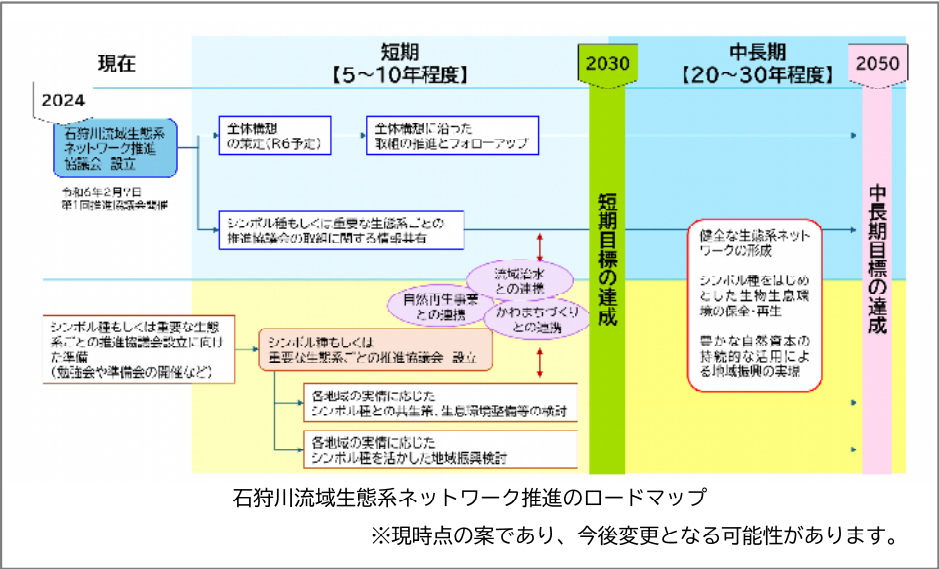
第1章 全体構想について

1.1 全体構想の位置づけ

全体構想は、生態系ネットワークの理念および経緯を踏まえ、石狩川流域における生態系ネットワークの全体像と目標、今後の取組の方向性について、長期的な展望をとりまとめ、取組に参画する多様な主体と共有するものです。取組の進捗や課題の変化等を踏まえ、必要に応じて改訂を行います。

1.2 対象区域

石狩川流域生態系ネットワーク全体構想の対象範囲は、石狩川および石狩川に合流する全ての支川の大谷管理区間、指定区間、準用河川、普通河川とそれらの集水域を含む石狩川流域全域とします。



4.4 流域の多様な主体と期待される役割

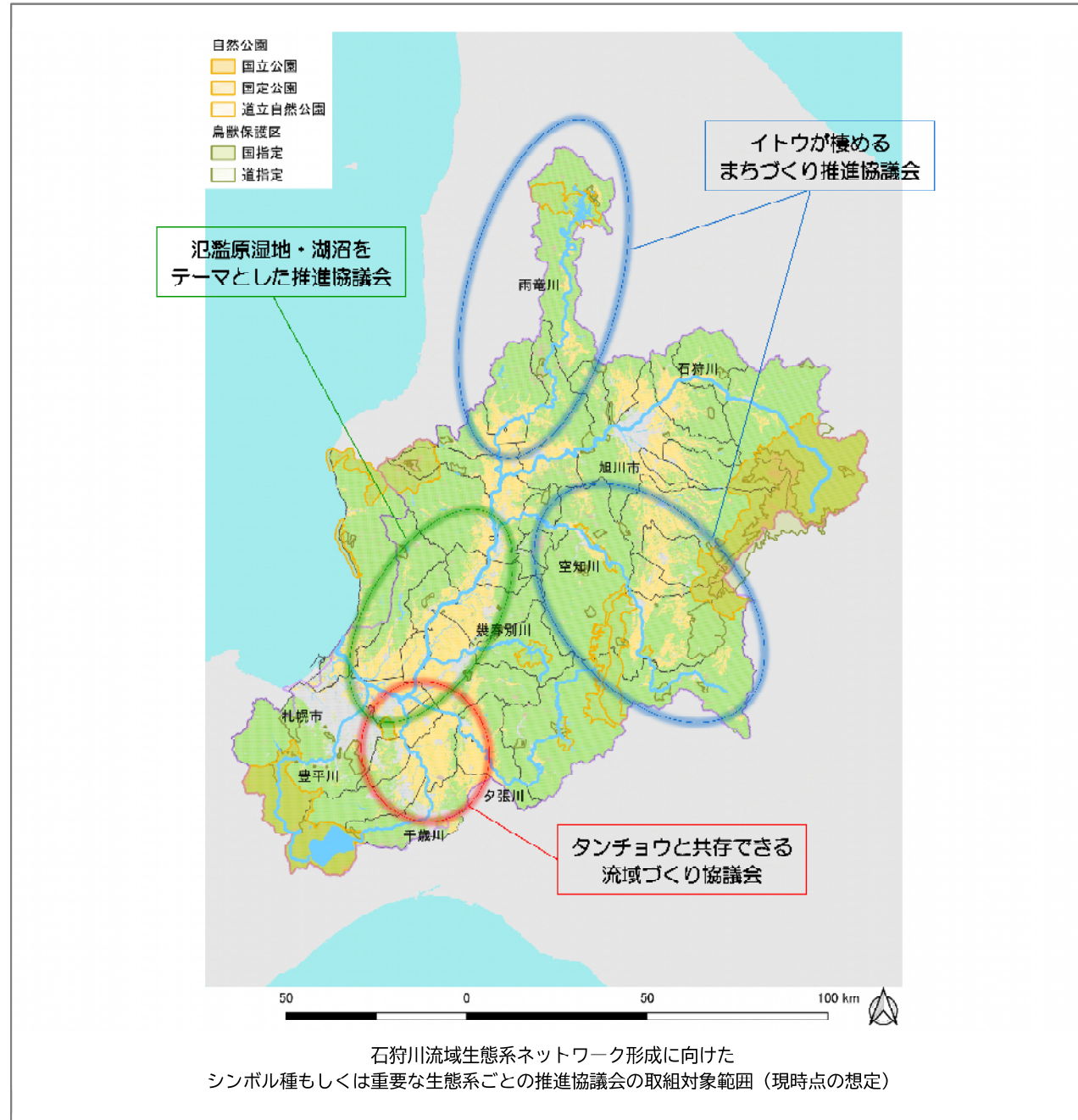
流域の多様な主体と期待される役割のイメージ

	連携・協働が想定される主体							
	学識者	北海道開発建設部 札幌・旭川 事務所	北海道開発局 札幌・旭川 事務所	北海道（空知総合振興局・石狩振興局・上川総合振興局）	自治体	民間事業者	教育機関	・市民団体 ・NPO
【1】生物生息環境の保全・再生								
1-1 石狩川流域における生態系ネットワークの観点から重要なエリアや空間構造を検討する。	●	●	●	●	●			
1-2 重要なエリアや空間構造を保全・再生する。	△	●	●	●	●	●	●	●
1-3 外来種の侵入や農薬・化学物質による汚染などを防止する。	△	●	●	●	●	●	○	●
1-4 生物の系統や個体群を保全・再生する。	△	○	●	○	○	●	●	○
【2】豊かな自然資本の持続的な活用による地域振興・経済活性化								
2-1 学校教育や社会教育における自然観察や自然環境学習に活用する。	○	○	○	○	●		●	●
2-2 一次産業の産物・加工品を地域ブランド化し、付加価値を向上する。	△	○		○	●	●		
2-3 ガイド等の自然資本に立脚した新たな事業を検討・育成し、地域の稼ぐ力を向上する。	△	○		○	●	●		●
【3】野生生物と地域生活・産業の両立								
3-1 生態系ネットワークに関連する取組や情報などを発信・普及啓発し、地域の理解を醸成する。	●	●	●	●	●	●	●	●
3-2 観察等の来訪者による迷惑や危険行為を防止する。	△	●	●	●	●	●		●
3-3 農業における野生生物との軋轢を回避し、多様な生物の保全をはじめとした農業・農村の多面的機能を維持・向上する。	△			●	●	●	●	○
3-4 水産資源の遺伝系統等を踏まえ、野生魚を活用した持続可能な漁業を確立する。	△			△	●	●	●	
3-5 生態系ネットワークとその他の空間利用計画等との両立方策を検討し、実施する。	△	●	○	●	●			○

●：主要な主体となって取り組む ○：主要な主体と連携して取り組む △：取組への助言を行う

先行事例の紹介：石狩川流域生態系ネットワーク全体構想

- 各シンボル種ごとの個別協議会の取組対象範囲を大まかに定めたページ。



ロードマップ（案）

- ロードマップ（案）として、後志利別川の河川環境および地域特性を踏まえ、大型鳥類の飛来状況等と地元の意向も鑑みて、将来像と目標を設定する。
- 短期目標、中長期目標を設定するが、各主体の取組方針や考え方、これまでの実施状況やその体制等を尊重し、取組に応じて柔軟に目標達成年を設定する。

